

問題・背景

社交不安は社会的場面において、苦痛を感じ、それによって回避行動を示すため、学業や社会生活、対人関係といった場面において様々な支障をきたします（Antony & Rowa, 2008 鈴木監訳 2011）。Leary（1983a）や Clark & Wells（1995）, Rapee & Heimberg（1997）といった社交不安に代表される心理学的モデルにおいて自己イメージといった心的イメージが社交不安の発症や維持に関連しているということが示されています。そこで Moriya（2018）は社交不安と心的イメージのサブシステムである物体イメージ（物体や場面に関する視覚情報を色、形状、明るさなどで処理する機能）・空間イメージ（物体の部品の空間的関連性や配置、物体の動きや変化、空間操作の情報処理機能）との関連を示しました。また、注意制御機能が不適応な心的イメージを有する社交不安者の社交不安を軽減する可能性があることを示しました。しかし、Moriya（2018）の研究は質問紙調査のみの研究であり、物体イメージ・空間イメージを測定する尺度（VISQ）が使用傾向を測定する尺度であったため客観的なデータではありませんでした。そこで、本研究では物体イメージ・空間イメージの測定に認知課題を用いて検討します。また、注意制御機能の下位因子である「選択的注意」「転換的注意」「分割的注意」それぞれについて適応な心的イメージを有する社交不安者の社交不安を軽減するにあり得るかを検討します。

方法

大学生 40 名（男性 21 名、女性 19 名）を対象に質問紙への回答と認知課題への取り組みを求めました。質問紙は笹川他（2004）が作成した Fear of Negative Evaluation 短縮版（FNE 短縮版）、川原・松岡（2009）が作成した Visual imagery Style Questionnaire（VISQ）、今井他（2015）が作成した Voluntary Attention Control Scale（VACS）、大久保・鈴木（2014）が作成した日本語版 FLANDERS 利き手テストを使用しました。また、物体イメージを測定する認知課題として Blajenkova, Kozhevnikov & Motes（2006）が作成した Degraded Pictures Test（DPT）を改変したものを使用しました。空間イメージを測定する認知課題として Shepard & Metzler（1971）が作成し、Ganis & Kievit（2015）が改訂した Mental Rotation Task（MRT）を使用しました。

結果と考察

相関分析の結果、社交不安と心的イメージのサブシステムである物体イメージ・空間イメージとの間には関連は見られませんでした。これは社交場面における恐怖感や不安感、回避行動、観察者視点の自己注目といった他の社交不安の中核症状による影響が強かった可能性が考えられます。また、社交不安と注意制御機能との間には関連は見られませんでした。よって、注意制御機能が不適応な心的イメージを持つ社交不安を軽減する調整変数となり得るかについては検討しませんでした。この結果は、先行研究において注意制御機能と特性不安との相関分析における効果量が小さいためだと考えられます。今後の課題として、サンプル

サイズの問題や物体イメージを測定できる認知課題の改良や開発,臨床群に対しての検討,先行研究で用いられた注意制御機能 (Effortful Control) における調整効果の検討が挙げられます。